

## 論文の和文要旨

論文題目	元ストリート・チルドレンの社会教育の実践過程に関する研究 —ニカラグアにおける NGO の支援活動を事例として—
氏名	楊 殿閣

本研究はニカラグアにおける NGO の活動を事例として、社会教育の実践過程に立ち現れる元ストリート・チルドレンの参加諸形態を解明し、新しい類型モデルに基づく参加者の特徴についての説明と、支援活動が行われている中で依然として家族再統合・社会復帰の実現が困難な子どもたちが存在する要因について考察する。

途上国（とりわけ都市部）におけるストリート・チルドレンの存在が社会問題として取りざたされたのは 20 世紀後半からである。先進国で社会通念となった近代的な子ども観からすれば、路上で生活・活動する子どもたちの状態は狼狽で憐憫であり、彼（女）らに対する介入・救済が必要である。また、1980 年代後半以降、権利論が台頭したことにより途上国における子どもの処遇をめぐる議論はますます活発化した。こうした機運の高まりは国際教育開発を推し進める原動力にもなった。このような潮流を背景に、今日では国際援助機関や NGO などによるストリート・チルドレンへの保護と支援の活動が多種多様な形で実施されている。しかし、路上で生活・活動する子どもたちの存在に対する問題意識が高まり、社会化のための支援活動が広く行われるようになったにもかかわらず、途上国では依然として多くの子どもたちは家族再統合・社会復帰において困難な局面に直面している。つまり、今日の文脈では単にストリート・チルドレンを取り巻く環境についてだけではなく、NGO などによって実施されている社会教育自体に対しても問い直す必要がある。またグローバル化と新自由主義が進行する中、社会教育の活動に期待される結果についても議論する余地はある。

ここでは、路上での生活・活動を中断して NGO によって実施されている支援活動に参加する子どもたちを元ストリート・チルドレンと定義し、彼（女）らを対象に実施されている一連の保護と支援にかかる諸活動を社会教育として位置づけ、論を進める。学校で実施される教育の内容や形態と NGO が実施する社会教育のそれとの間には言うまでもなく大きな差異がある。しかし、いずれも社会化過程として、子どもたちが一定の期間においてその教育システム内部の活動に参加しているにほかならないという前提に立つと、学校教育と社会教育のあり方は子どもたちがその後の社会参加における結節に対して役割を担っており、この点は両者に共通していると言える。そうであれば元ストリート・チルドレンの社会教育が果たし得る役割について考える際、分析の射程は NGO などの施設内部だ

けでは不十分であり、現地社会の文脈にも留意し、NGO 施設の外部環境として位置づけられる諸側面（とりわけ家族とコミュニティ社会の状況）との関係性も含む視点から吟味することが重要である。

本研究では予め元ストリート・チルドレンの社会教育について何らかの理論を設定して事例研究で検証していくというアプローチではなく、先行研究の整理から分析の視点や暫定的な仮説を立てるが、支援現場における実態の粗描や被験者のエージェンシーに対する解釈から帰納的に論述し、なぜ同じ社会教育プログラムを経験する元ストリート・チルドレンの中で異なる結果が生まれ、支援を受けながらも社会復帰・家族再統合に結びつかない子どもが多く存在するのかという命題に答える。そのため、筆者は長期に渡り対象に寄り添いながら、参与観察を行い、現地社会の文脈を踏まえ、当事者の視点や意味付けおよびそれに対する解釈から、NGO が実施する社会教育の全体像を明らかにし、従来の研究において問いに付されてこなかった支援する側と支援される側の相互作用から立ち現れる現象の内実の空洞化を埋める。

第1章では、先行研究の整理からストリート・チルドレンという二級市民が創出される要因と、現行の救済活動における支援する側の理論、および救済活動から離脱する支援される側の論理を整理し、そして両者の視点を突き合わせながら、NGO が実施する元ストリート・チルドレンの社会教育について吟味する際に重要となる3つの視点を提示する。第2章では、本研究の事例対象であるニカラグアの社会経済状況についてマクロの視点で概観し、そしてミクロの視点から貧困層の生活世界と子どもの社会化の実態について述べる。さらに現在ニカラグアにおける子どもの保護と支援および教育などの法制度についての現状を説明する。第3章では、事例対象についてより詳しく説明する。対象NGOの特徴や支援プログラムの実態、および支援活動の成果などについて紹介する。そして第4章では、新しい類型モデルを提示した上で、元ストリート・チルドレンの社会教育の参加過程を分類し、それぞれの類型における特徴と規定要因などについて具体的な事例やデータを用いながら分析する。さらに分析の結果から浮き彫りとなった焦点化すべき元ストリート・チルドレンの様相についてより詳しく考察した。終章では、ニカラグアにおける元ストリート・チルドレンの社会教育の実践過程に着目し、重要かつこれまで看過されてきた側面について考察したことの意義について述べる。そして、NGOによる元ストリート・チルドレンの社会教育が抱える課題や問題、および本研究の限界と今後の展望について述べ、締めくぐりとする。

エスノグラフィー分析では、参与観察から考案した参加者の類型モデルについて（従来の研究で言及されておらず、かつ支援現場でも使われていない枠組）、NGOの活動や規則に対する元ストリート・チルドレンの受け止め方を縦軸、彼（女）らの将来への見通しを横軸に設定すると、社会教育の実践過程における参加形態を4象限座標として提示することができる。4つの類型を相対化すると、第1象限（NGOの活動と規則（+）、将来への展望（+））は支援する側との関係および自己の将来に対する見通しの双方においてポジティブな特徴をもっている元ストリート・チルドレンであり、支援する側の立場からする

と社会教育にとって最も望ましい状態であると言える。これと対抗軸にあるのが第3象限（NGOの活動と規則（－）、将来への展望（－））であるが、支援する側との関係および自己の将来に対する展望の双方に対してネガティブであり、最もドロップアウトしやすい元ストリート・チルドレンである。しかし、第2象限（NGOの活動と規則（＋）、将来への展望（－））と第4象限（NGOの活動と規則（－）、将来への展望（＋））は、第1象限と第3象限に比べると、いずれも曖昧な状態にある。第2象限の元ストリート・チルドレンは支援活動に対して受け入れる立場であるが、だからといってそこから自己の社会化との結びつきが見えてくる訳ではない。また、第4象限の元ストリート・チルドレンは支援活動に対して消極的であるが、それとは別のところで自己の将来に対する戦略をもち、ある程度のイメージが出来ている。したがって、支援が行われている状況の中で、社会化に向かって進んでいるのは第1象限のみ、その他の象限は依然として社会化の実現が困難な元ストリート・チルドレンである。しかし、視点を変えると、支援される側のリアリティにおいては第1象限が唯一の進むべき方向であるとは限らない。

このように元ストリート・チルドレンの多様性について一定の説明ができたところで、更に一步踏み込んで考察すると、焦点化すべ問題が明らかとなった。つまり、第2象限と第4象限の元ストリート・チルドレンは社会化の実現において可能性を秘めているにもかかわらず、なかなか前進できないという現実問題が横たわっている。こうした子どもたちが支援活動からドロップアウトの方向に進まないように、あるいは少しでも良い状態で家族再統合・社会復帰が実現できるようにするためには、2つの取り組みが重要であると考えられる。1つ目は集団生活・活動における対応の見直しであり、いま1つはより個別対応を重視することである。前者については、当事者の多様性・参加形態に相違があることを踏まえると、集団性をより有効的に活用するためには支援現場で実施する諸活動のグループング基準を見直す余地があり、そこに本研究で提示するモデルの応用に意義はある。後者については、支援される側の声を汲み上げるところから見えてきた課題であり、これは支援学・教育学において既に周知されているところでもある。ここでの問題は常に資金不足・人手不足という円満具足ではないNGOの特徴・条件の下で、どこまで求めるべきかである。また問題の克服は、市民社会の一端を担うNGOに全てを委譲するのではなく、よりスケールアップした次元での対応も求められる。

元ストリート・チルドレンの社会教育への参加は、個々人にとってそれぞれのライフコースにおける一時的なものであり、彼（女）らの社会復帰・家族再統合についてより広い視野、つまり社会教育に参加する前と社会教育から退出した後の状況も含めて分析することが重要である。この点について本研究は対象事例の中で横断的な情報収集を中心に行ってきたため、縦断的な情報収集の抜け落ちがあった。また、支援する側の視点について必ずしも十分に検討したとは言えない部分はある。さらに本研究は新しい分析の枠組みモデルを提示したが、それぞれの象限における特徴の説明はまだ深化する必要があり、各象限の構成要素についてより詳細に分析し、モデルの有効性について個別レベルのデータ収取・分析から検証していく必要がある。こうした点については、今後の課題である。